

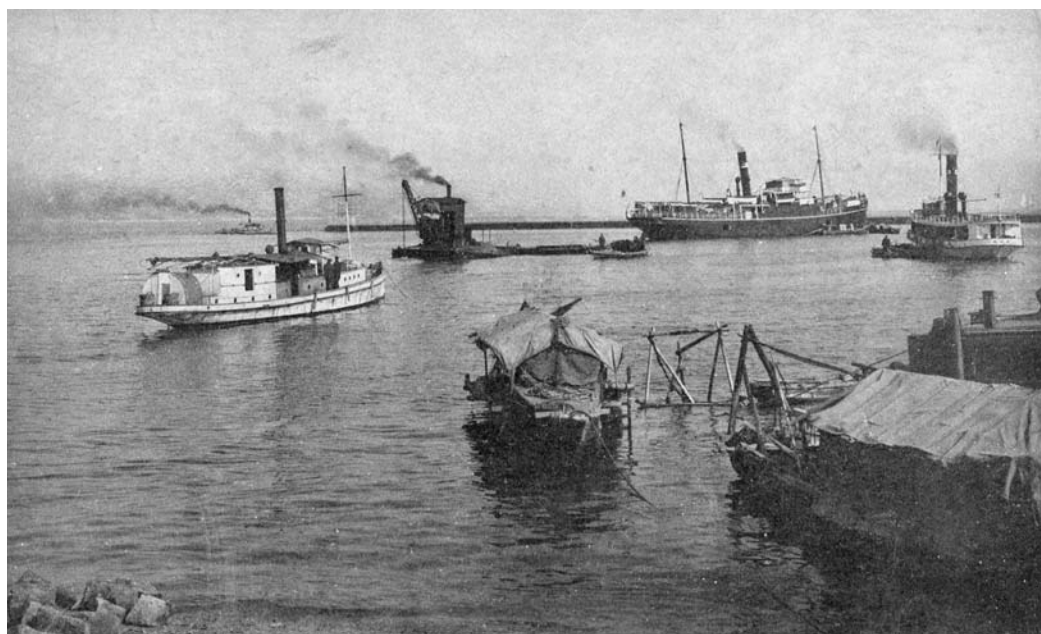
第九回 今治ひろこ小路の由来

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第九回は、JR今治駅と今治港観光棧橋を結ぶ広小路の由来を紹介し、大正・昭和初期の今治を歴史散歩したいと思います。

●今治市の誕生と築港整備

大正九（一九二〇）年二月、今治町と日吉村が合併し、市制では愛媛県で二番目、四国で六番目の今治市が誕生します。誕生の背景には、伸長の著しい綿織物業があり、この主要地域の両町村が一つになることで、今後の都市計画に弾みがつきました。

当時の今治市は、四国のマンチエスターとも呼ばれ、今治港の取扱貨物の大半は綿



大正13年当時の今治港の様子（今治駅開業記念絵葉書より）

業関係が占めました。しかし、港湾整備の遅れで大型船の接岸ができず、沖にいる本船との連絡は舢艀はしけふねが使用されるなど、本格的な築港が急務とされました。

そこへ大正一〇年六月、今治港が愛媛県

初の国の重要港湾に指定され、翌一年二月には四国初の開港場となります。そのことで、同九年五月から県の補助で始まっていた築港整備が国の直轄事業へと変わり、昭和九（一九三四）年三月に完了します。

●今治駅の開業と広小路整備

築港整備が進むなか、国鉄予讃線の敷設ふせつ工事が西条から松山へ向かって西伸してきます。今治駅の開業は大正一三（一九二四）年二月で、松山駅は昭和二（一九二七）年四月のことでした。この開業に合わせ、今治市は駅と港をつなぐ一〇間幅けんの新道路「広小路」の整備に着手し（一間は約一・八メートル）、この沿線に公会堂も新築されます。

ところで、今治城下町の町割りには、辰之口門から本町通りへ伸びる、海岸線に平行なラインを基軸とし、外郭ラインの一つが別宮大山神社・南光坊から柳町・旭町通り・蒼社橋へと至る西条街道でした。つまりは、新たに設ける広小路は、

近世の軸との交差を生む縦軸線となります。
 広小路の地名は、江戸時代の旧城下町によく見られ、延焼を防ぐための防火帯の役割を果たしました。明治以降に新設された



初代の今治駅舎と乗合自動車（昭和初年の絵葉書より）

ものは、今治市のように目抜き通りの役割を果たすところもありました。

●時代の交差点「ロータリー」

今治の広小路は、まず駅前から西条街道のラインまでが大正一三年に竣工します。当時は、この突き当りに公会堂と市庁舎がありました（現、みずほ銀行・四国電力付近）。これらをクランクしてロータリーを生みだし、そこから港までが昭和四年三月に竣工。この広小路線の貫通で、市営乗合自動車（バス）の運行が始まり、今治・尾道の鉄道連絡航路の利用客も増えていきます。

やがて近見村（昭和八年）、立花村（同一五年）を編入合併し、道路網の都市計画は広範囲に及びますが、昭和二〇（一九四五）年八月の空襲で市中心市街地は焼け野原となります。戦後は戦災復興計画のもと市街地の再生が進みますが、広小路は二〇間幅に拡張し、復員兵が飛行場建設と見間違ふほどでした。市庁

舎の場所は同二三年に現在地へ移転し、ロータリーを都心とする新生・今治市の船出となります。



片原町から眺めた広小路（昭和初年の絵葉書より）